

えとぶり

No. 20 2010年 夏の号

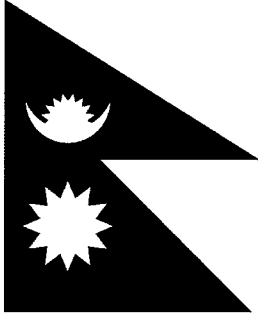
徳島県青年海外協力協会会報
徳島県協力隊を育てる会会報

How are you after a long time ?

「えとぶり」とは、阿波弁で「久しぶり、元気ですか?」という意味です。

E T T O B U R I

ネパール連邦民主共和国



Federal Democratic
Republic of Nepal



徳島県青年海外協力協会元会長
井原 宏

高橋 久美隊員 「えとぶり」シリーズ No.17

コミュニケーション力

「えとぶり」の名前は、私が昭和63年頃OB会会長を引き継ぐ前に、前任の逢坂会長が付けられたものと思います。その頃中・四国ブロックでは、各県の方言で会報名が付けられて発行され始めていて、逢坂さんは阿波弁の名人でしたから、ぴったりのネーミングだと思います。

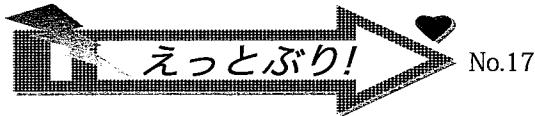
現在の「えとぶり」創刊は、1999年（平成11年）11月で年数回のペースで発行され続けていますが、ひとえに「徳島県協力隊を育てる会」のおかげと感謝しております。会報は会の活動をPRし、記録として残る貴重な資料となりますので、今後とも両会が協力して発行され続けることと思います。

私は四半世紀も前の昭和59年I次隊でモロッコに測量隊員として活動してきました。その頃のモロッコには、建築、測量、職業訓練学校の先生などが多く、女性隊員はごくわずかでしたが、今では、辺鄙な砂漠の町にも村落開発で女性隊員が派遣されています。当時からすると考えられないことです。

先日は久しぶりに春の募集説明会に参加して、要請職種の変化に驚きました。第一次産

業（農林水産業）が激減（21%）し、土木・建築もわずかとなり、保健衛生（22%）と教育文化（45%）で約7割を占めるようになりました。まだまだ途上国では、農林水産業が国を支える主な産業だと思いますが、要請が減ったり要請に応えられる若者が少ないのが現状のようです。

しかし、ものづくりは減っても技術移転・ひとづくりは健在です。数年前の育てる会総会で、スペインの日本人学校から帰国した小学校の先生が、現地で中米の国から働きに来ていた青年から感謝された話を披露してくださいました。「今日僕たちがこの国に働きに来たのも、JOCVの先生に教えてもらい、勉強を頑張ったからです。日本人に会うと声をかけて、お礼を言いたくなるんです。」県内のガーナやベトナムの留学生の中にも、かつての隊員の教え子がいて、『先生』隊員のことをうらやましく思います。でも『先生』に限らず、今もっとも求められているコミュニケーション力は、どの隊員も身につけて帰国されていると思います。これがわれわれOVの売りなのではないでしょうか？



「ヒマラヤの国より」

◇20-1 ネパール 保健師

高橋 久美

ナマステ!!

徳島の皆さま、えっとぶりです。

私は、首都カトマンズから西へ約200km、フェワ湖とアンナプルナ連峰の展望で知られるネパール第三の都市、ポカラという街で保健師として活動しています。

ポカラの街からは目の前に8000m級のヒマラヤが望めます。お天気の良い日の景色は圧巻! 本当にすばらしく、世界各国より観光客がたくさん訪れます。また、ポカラには私たち同様の顔立ちをした山岳民族がたくさん住んでおり、街を歩いているとネパール人に間違えられることもしばしばあります。

そんなまちで、私は市役所に勤務しています。ポカラ市役所には市内22か所をひと月で巡回するという、巡回型のMCHクリニック (Mother&Child Clinic) があり、それに同行してスタッフと一緒に活動しています。クリニックの役割には、大きく分けて3つの柱①予防接種②家族計画指導③妊産婦健診があり、その他にも病児の診察や薬の処方なんかも行っています。私は、その中でも妊産婦健診に焦点をあて積極的に健診を受けるように住民に働きかけています。当初はスタッフ間でも妊産婦健診の必要性を十分に感じておらず、ただ妊娠中に必要な破傷風の注射を行うだけで健診というのは名ばかりでした。まだまだ、自宅出産 (専門家不在) や若年出産、知識のないままの妊娠、病院へのアクセスの悪さ、貧困等のため妊産婦死亡率、乳幼児死亡率の高いのがネパールです。もっと妊産婦健診を充実させたい! という私の話に耳を傾けてくれたカウンターパートをはじめ、スタッフのみんなのおかげで、現在ではたくさんの妊婦さんにサービスを提供できています。クリニックでは、スタッフと一緒に妊産婦健診を行いながら、妊娠・出産・育児・栄養等についての情報を提供しています。妊産婦健診では、異常の早期発見はもちろんのことですが、それ以上に妊産婦さんに自分の身体や赤ちゃんについて考えてもらうこと、情報を得てもらうことに重点を置いています。ネパールの明るい未来のために、つたないネパール語で奮闘しています。残りの任期も少なくなりました。最後の最後にカウンターパートの離職等、課題は残っていますが、ポカラでこのサービスが存続していくことを信じて最後まで頑張っていきたいと思っています。

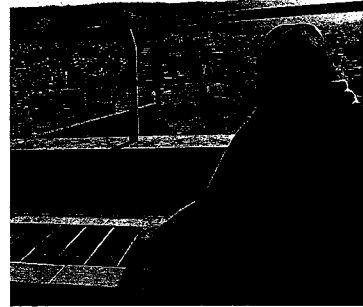
徳島で応援してくださっている皆様には本当に感謝しています。そして、再会できる日をととても楽しみにしています。

最後にふるさと宅急便などお送りいただきまして、本当にありがとうございました。

「ボリビアと日本」

◇20-4 ボリビア 環境教育 九十九 貴史

ここボリビアのラパス市に配属され一年以上が過ぎた。私の任地であるラパス市はボリビアの首都であり人口流入も著しく、国の政府機関、各国の大使館や様々な企業もラパスに集まる。所謂都会



なのである。「街には日本の1970年代のような雰囲気が漂っている」私は1970年代を知らないが、あるシニアボランティアの方がそうおっしゃっていた。

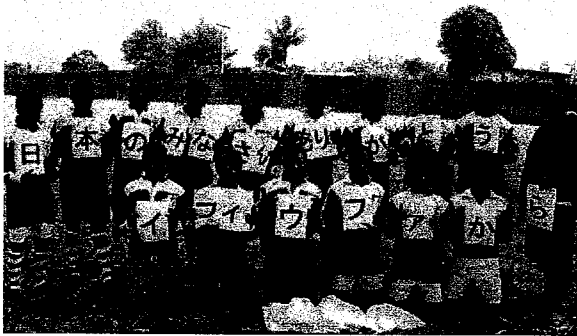
また、街を歩けば見覚えのある日本車の数々を見ることが出来る。中でも興味深いのは、ハイエースなどの所謂大型バンが市民の交通の足となっていることだ。どういうことかと言うと、日本では考えられないが、7~8人乗り大型バンに最高14人の客が乗れるように改造したバンがラパスの街中を所狭し、と走り回る。市民はそのバンに乗って目的地へ向かう。ここボリビアにいと度肝を抜かれることは多々あるが、そんなボリビアでの生活もなれすっかりパセーニョ (ラパスに住む人のこと) になってしまった私の視点から見た日本とボリビアについて以下に書く。

日本は本当に美しい。そしてなにより生活が豊かである。例えば現代の日本社会ではどこにでもコンビニエンスストアがあり自動販売機がある。また上下水道や冷暖房設備もしっかりしている。今や日本ならどこに住んでもストレスのない快適な暮らしを送ることができるだろう。なにより教育が行き届いていることに今さら気がついた。ボリビアの学校は午前と午後に分かれている。つまりボリビアでは、日本でいう義務教育課程の子供達は午前中もしくは午後のみしか学校で教育を受けないのである。そして子供達は学校に行っていない間は働いている。貧しい地域に行けばいくほど働く子供の数が多くなる。また学校教育の現場では、日本の学校では当たり前のように音楽室があり図工室があり体育館がありプールがある。しかしボリビアではそんな学校は一枚も

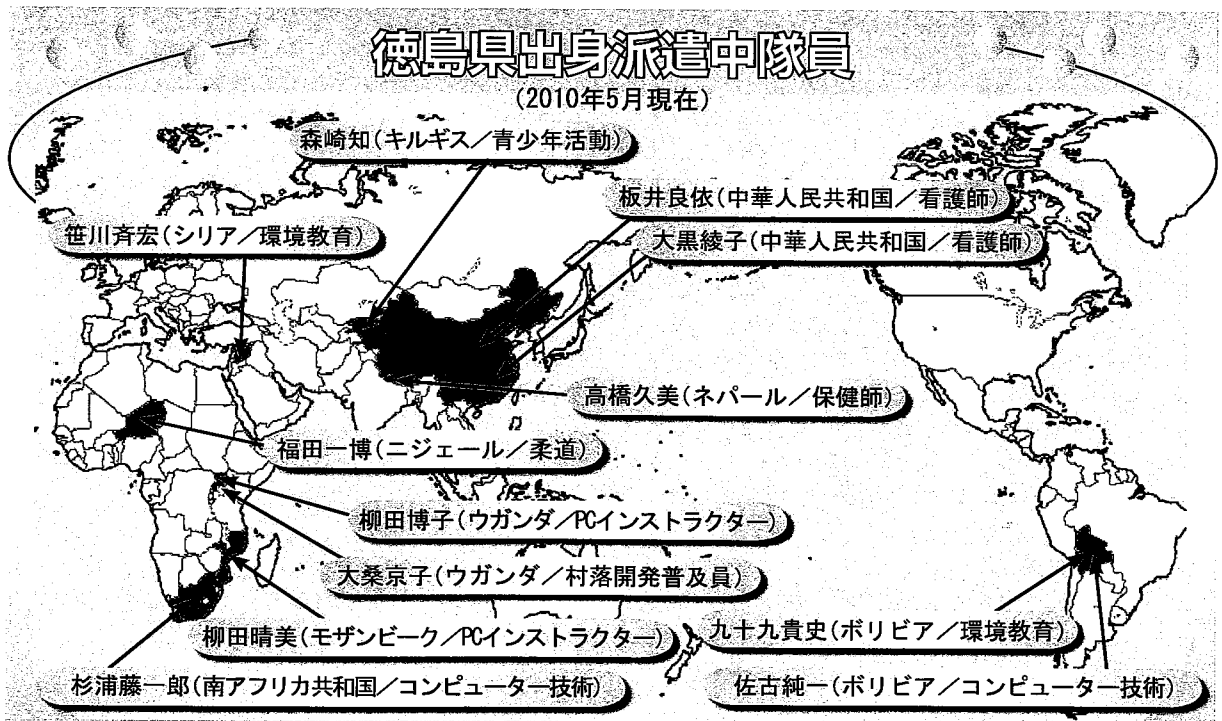
見当たらない。また教材に関しても不足している。
 様々な問題が多く残されているボリビアであるが今日本と急接近している。ウユニ塩湖に眠るリチウム開発を巡って各先進国がボリビア政府に掛け合っているが、つい数週間前にボリビアの輸出量がアメリカ合衆国やブラジルなどを抜いて、日本への輸出量がトップになったという。またボリビア人に「日本はボリビアに対し多くの援助を行ってくれている。感謝している。」と言われる場面に出くわす。今後日本とボリビアとの国交関係に注目である。

【RUMI企画 No. 2】
 海外で活躍中のOB/OGからの便りを掲載しております。掲載者の姓五さんのお名前をお借りして「RUMI企画」とを付けました。

「パプアニューギニアとラグビー」
 9-1 PNG Russell Deka HARADA



一般的に南太平洋ではサッカーよりもラグビーが盛んなイメージがありますが、ここパプアニューギニアではそれが極端で、ラグビーリーグ（日本で行われている15人制のラグビーはラグビーユニオンと違って豪州の13人制のプロリーグ）では世界ランキング4位なのに、サッカーは世界最下位です。元々白人の宣教師たちがやってくるまで、部族間の闘争が激しく、血の気の盛んな人の多いハイランド地方の人々の気質にあったのかもしれません。隊員活動中にラグビー仲間だったラッソルが亡くなって早や10年。ラッソルの家族になってからいろんなことを行ってきましたが、ラッソルの兄弟が2人共小学校の先生をしていることから、学校での活動を多く行ってきました。文房具や辞書、コンピュータの寄贈、日本の学生さんから応援もしてもらっています。去年は、古くなったラグビーユニフォームを贈ってもらいました。毎年学校対抗のラグビー大会があるのですが、マネージャーをしているイフィウファ小学校のラグビーチームはなんと3年連続優勝の快進撃を続けています。事故で片腕を無くしたコーチのエディーは口が悪いのですが、誰もが認める良いコーチだと思います。連続優勝を続けられている秘訣のひとつにモチベーションのキープがあると思います。毎年、ユニフォームを新しくしたり、ボールや用具も出来る限り支援したりしています。パプアニューギニアは決して貧しい国ではないのですが、多くのものを豪州や海外から輸入していることにより、物価が高い国の1つです。わずかな額の学費すらも払



えないで学校を辞めてしまう子供たちがたくさんいます。そうした子供たちの励みにもなっているのが、このラグビーチームだと思います。ラグビーを通じて他の学校の子供たちとも知り合いになり、将来は州の代表チームや国代表、豪州や英国でのチームでプレイすることを夢見るのは、日本の子供たちがプロ野球選手やサッカー選手にあこがれるのと変わりません。今はこの国唯一の国立教育大学でITマネージャーをしていますが、将来は自分のグラウンドを作って、チームを持ち、子供たちがプレイする姿を応援するのが夢です。

おかえりなさい、えっとぶり。

「帰国報告」

◇19-2 エチオピア 美術 神田 直子



Addis Hitot Income Generating Activity Group 2001

※写真の2001とあるのはエチオピア暦はグレゴリオ暦よりも7年遅れのためです。

えっとぶり！この冬、帰国しました。ふるさと日より、励みになっていました。ありがとうございます！エチオピアでは店舗デザインやクラフトデザイン、そして余暇を利用して町内会のHIVコミュニティのサポートなどを行いました。そこでは会社経営者からスラムの女性まで、色々な人々と協力し共に仕事をすることができました。また、日本の協力によるプログラムで完成した学校で初めて学べるようになった子どもたちの喜びの一方で、膨大なカネ・モノの援助に独立心を失ってしまった人々など一言では表せない彼らの日々の暮らしを知ることとなりました。楽しいことばかりではなかったけれど、今は13 months of sunshineと呼ばれるその国の澄み

切った青い空を懐かしく思います。この二年間で私が出たことは、日本とは違うもうひとつの視点をもてるようになったこと。そして、エチオピアでの経験をこれからの生活のなかで時間をかけて理解していくという課題だと思っています。

【活動報告】

ドキュメンタリー映画「チョコラ!」上映会実施

JICA国際協力推進員 福田 純代

2010年4月18日（日）、徳島市内の「あわぎんホール郷土文化会館」において、平成22年度春募集ボランティア体験談&募集説明会が実施されました。今回の募集説明会は、スペシャルバージョン。溝上JOCA理事のご尽力により、OB会主催のイベントとのコラボレーションが実現しました。



NGO「モヨ・チルドレンセンター」の松下照美さん

まず午前中は、ケニアのストリートチルドレンの現状を撮影したドキュメンタリー映画「チョコラ!」第1回上映会と、映画撮影に協力されたケニアのNGO団体「モヨ・チルドレンセンター」を主宰する松下照美氏（徳島県出身）のトークショー。午後からは、JICA海外ボランティア体験談&募集説明会。そして、見逃した方のために「チョコラ!」第2回上映会を実施しました。

来客の方々やOB/OGの皆さん方など、のべ100名が来場し、会場は大いににぎわいました。一日がかりの長丁場のイベントでしたが、OB会の皆さんによる“世界のお茶”も振舞われ、終始和やかな雰囲気が進んでいきました。

会場設営や撤収・お茶の準備など、さすがにボランティアOB/OG！、手馴れた様子でスムーズに、計画通りに時間が流れていきました。普段は、それぞれの場所でそれぞれの生活を過ごされているOB会メンバーではありますが、“協力隊”のキーワードでひとつになれる仲間たち、徳島県のOB会メンバーのパワーを再確認した一日でした。

徳島県青年海外協力協会・
徳島県協力隊を育てる会会報「えっとぶり」

平成22年「夏の号」(第20報)
発行日：平成22年6月

えっとぶり

◆企画発行… 徳島県青年海外協力協会
徳島県協力隊を育てる会

◆編集… 辻 誉

【印刷】 多田印刷株式会社(吉野川市鴨島町鴨島 657番地10)